

創造について ―瞬間とポイエシス

小林 信之

通常わたしたちによって生きられる時間は、フッサールの時間意識の分析によって明らかとなっており、過去把持と未来予持をはらんだ現在、そのありありとした現前性を起点とするほかない。日本語の「今……しているところだ」という言い回しに示されるように、一定の厚みをもった時間経験を基にして、わたしたちは「今」を分節化し、「今」を生きている。時間に関するこの実感の拘束力を、わたしたちはほとんど逃れることができないように感じられる。

もちろんこの世界に生起する出来事にはつねに「変化」が前提されるとすれば、プラトンが『パルメニデス』で語ったように、ある状態から別の状態への移行行きにおいて、切断の瞬間（「突如」*exaiphnes*）を想定せねばならないだろう。この瞬間は、動と静のあいだに座を占め、それ自身時間に属していないために、わたしたちの理解可能性の地平において、事後的な痕跡として気づかれるか、あるいはたえず失われゆく仮象として思惟されるかするほかない。

しかしこのように切断であり非連続である瞬間のうちに、仮象の否定性を見るのではなく、むしろそれを転倒させ、そこに「永遠のアトム」（キルケゴール『不安の概念』）を見てとるような思考の系譜がある。西田幾多郎もまたそうした系譜に位置づけることができるように思われる。たとえば西田のいう「永遠の今」とは、自己自身を限定することで、この日常の推移と変化を可能にするものであり、それゆえ単に抽象概念にとどまるのではなく、むしろ実在そのものの生々しい直接的・具体的現前とみなされねばならない。

このように非連続を連続へと転じ、時間そのものを生起せしめる力の場、そこにこそ創造的な飛躍が成就している。絶対的な矛盾をはらみ、瞬間瞬間に死につつ、だが同時に生まれいづる「今」が、時間と実在の成立の源泉に見てとられるのである。

西田哲学における創造作用としてのポイエシスとは、隔絶した個的現在を連続性へと架橋することであり、すなわち昨日のわたしと今日のわたし、わたしと他者、個物と歴史的世界といった矛盾的關係をその自己同一性において行為的・制作的に直観することである。そしてこのとき、「作られたもの」（すでに生成した世界）から「作る働き」そのものへとまなざしを向けかえる転回は、一方で哲学的・方法的態度（一種のエポケー）と見なしうるが、しかし同時に忘れてはならないのは、それが詩的経験の原初性に根ざしていることである。

詩的言語の特異性は、たとえ紋切り型の使い古された言葉であっても、それを字義どおりに理解することで完結するのではなく、その言葉を享受する者にとって、つねに一回的経験へと個別化していく点にある。わたしたちは、わたしたちが言葉に自己を仮託するもつとも基礎的な働きを詩のうちに見いだすことができるとともに、勝義において、作る働き（ポイエシス）そのものの原質にふれていくのだといえよう。